

フィールドワークと授業構想・授業実践を繋ぐ学部生の社会科授業力育成

宮 菌 衛

も く じ

- 1 本研究の位置づけ
 - (1) 本研究の根底にある基本的「問い」
 - (2) 新潟大学教育学部の4年間を一貫する実践的カリキュラムの特徴と課題
 - (3) 学部生の社会科授業力育成の課題
- 2 社会科授業力育成のための授業開発—その内容の概要とシラバス—
 - (1) 「社会科教材開発実習」取組みの概要—授業実践力重視への転換—
 - (2) 先行実践研究の概要
 - (3) 「社会科教材開発実習Ⅱ」で育成する社会科授業力
- 3 「社会科教材開発実習Ⅱ」の取組み概要
 - (1) 2011年度～2013年度の取組み概要
 - (2) 2013年度の取組み概要
- 4 「社会科教材開発実習Ⅱ」の検証—2013年度聴講生の振り返りから—
 - (1) 調査方法
 - (2) 「社会科教材開発実習Ⅱ」の意義・成果と課題
 - (3) 今後の改善のポイント・課題

キーワード

フィールドワーク力, 授業構想・授業実践力, 社会科授業力育成, チーム力育成
学部3年生, 附属学校・公立学校との連携

1 本研究の位置づけ

(1) 本研究の根底にある基本的「問い」

教員養成学部生の社会科授業力を育成するために、どのような課題・内容を、どの段階で、どのように学生に提示・組織することが可能であり、有効なのだろうか。これが本論文の根底にある基本的な「問い」である。

本論文では、①フィールドワークと授業構想・授業実践を一連の作業として繋ぐ取組、②学部3年生のチームとしての取組の意義・成果について、2～3年次学生を主対象に開講している「社会科教材開発実習Ⅰ・Ⅱ」の取り組みを踏まえて論じることとする。

(2) 新潟大学教育学部の4年間を一貫する実践的カリキュラムの特徴と課題

筆者の勤務する新潟大学教育学部は、一時期（1998年度～2007年度）いわゆるゼロ免課程の学生定員数が多数となり、「教育人間科学部」に改組したが、2008年度に再度教員養成を中心とする、新「教育学部」として出発した。当然、現代の教育課題を踏まえた教員養成カリキュラムの充実、就中、実践的指導力育成のためのカリキュラム・授業内容の改善・充実が強く求められる。

教育人間科学部時代から、新潟市を中心とする学校・教育委員会と連携・協力関係を築きあげ、「4年一貫の実践的カリキュラム」の改善・充実に学部として取り組んできた。主なものをあげてみる。

- 【1年次】「入門教育実習（選択）」
「フレンドシップ実習（選択）」
【2年次】「附属小中学校での1週間の観察・参加実習」（必修）
【3年次】主免教育実習（春・秋2週間）
【4年次】副免教育実習（主に春期2週間）
「研究教育実習」（選択）
「教職実践演習」（必修・附属研究会参観や新潟市12年研修授業参観・検討会参加等）
【3年次後半以降】学習支援ボランティア
（選択・主免教育実習経験者・新潟市）

「研究教育実習」において、附属学校や公立学校の協力・支援を得て、学生が研究授業に取り組む教科が複数ある。

では、社会科の実践的な授業力育成にはどのような課題があるのだろうか。

(3) 学部生の社会科授業力育成の課題

現在、新潟大学教育学部では、社会科に関わる教科教育法講義として、筆者を含む社会科教育学研究室教員2名が中心となって、毎年、以下のように12コマの授業を開講している。対象は教育学部生が中心であるが、中等社会科教育法、地理歴史科教育法、公民科教育法には多くの人文・経済・法学部生が聴講している。2013年度は、12コマの講義で合計800名近くの聴講者数であった。

表1 社会科関係教科教育法講義・コマ数・聴講者

講義名	講義コマ数	聴講者数
生活科教育法	前・後期2	230名
初等社会科教育法	前・後期2	195名
中等社会科教育法※	I～IV 4	177名
地理歴史科教育法	I～II 2	84名
公民科教育法	I～II 2	107名
合計	12	793名

（※Ⅱ・Ⅲには一部教科専門教員の協力有り）

（中等社会科教育法以下は、全学学生を対象）

このように多くのコマ数・聴講者数であるが、殆どの講義で可能な限り個人若しくはグループでの学習指導案作成や模擬授業、附属学校の授業参観等を取り入れている。社会科教育関係の教科教育法講義以外でも、3年次主免教育実習事前指導として指導案作成と模擬授業の機会も設けている。

更に、4年次後期に開講されている「教職実践演習」の一環として、「新潟市教職12年経験者研修」の校内研究授業の参観と授業検討会への参加が可能

であり、実践を通して学ぶ、或いは実践から学ぶ機会は以前に較べると格段に充実している。

しかし、これまで社会科授業力育成の観点から、学生自らが社会事象に関心を向け、その中から教材を発掘・選択し、単元開発・授業構想・授業実践・授業分析まで一貫して取り組むことで、実践を通して授業力を鍛え・高める機会が十分に組織されているとは言えなかった。

社会科教員の授業力・指導力は、いわゆる教室内での「授業方法・技術力」で完結するものではない。教員自身が、具体的な社会事象に関心を向け、追究に値する問いやテーマを見つけ、自らそれらを追究していく力、自らが追究したことを基に、子どもが追究していきたいくなる問いやテーマに組み替えて教材化・授業化する力が、社会科教員の授業力・指導力向上にとって大切な構成要素である。

特に、地域の社会事象に関わり、聞き取り・現地調査・見学等に取り組む体験を通して、社会について学ぶことの魅力を自ら実感的に感じられる機会を、学部生の内に育むことが必要だと考える。ここではそれを「フィールドワーク力」と呼ぶことにする。

「フィールドワーク力」と子どもも理解を踏まえた授業構想・実践力を繋ぐことによって、社会科教員を目指す学生の授業を創造・構築し、実践する授業力は育つと考える。

2 社会科授業力育成のための授業開発 —その内容の概要とシラバス—

(1) 「社会科教材開発実習Ⅱ」の取組み概要 —授業実践力重視への転換—

1) 学部「社会教材開発実習Ⅰ・Ⅱ」

本論は、学部生対象の「社会科教材開発実習Ⅰ・Ⅱ」（Ⅰは2年生対象、Ⅱは3年生対象）での取り組みがベースとなっている。

聴講者は基本的にオープンにしているが、実質、研究室所属学生が中心である。

2) これまでの取り組みの経緯と新たな取組

①【第一段階—フィールドワーク中心】

社会科教育学研究室では1997年（平成9年）度から、学部2・3年生を対象に、地域の社会事象についてのフィールドワークの授業に取り組み始めた。今年度で、18年目になる。（その間、堀井教授・児玉教授と共同）

第1回は、近代日本の公害問題の原点である足尾銅山鉍毒事件の現場としての足尾銅山精錬所跡等の現地見学・現地での聞き取り活動を1997年9月に組織した。2. 3年生を中心に、院生・指導教員も含めて総勢23名のメンバーが参加した。夏休み前から対象・テーマ設定に取り組み、当日を迎えた。

以後、新潟県内を中心に新潟水俣病問題、信濃川とJ R発電所、東京電力柏崎刈羽原子力発電所、村上市の町屋を生かした町づくり、佐渡の朱鷺再生への活動、山古志の闘牛を通してみる伝統文化の継承等の事象・テーマを学生自身が話し合いの上で設定して、調査・見学活動を組織し、それをまとめる活動を中心にしてきた。

これまで、フィールドワークを踏まえて、授業構想まで取り組んではきた。しかし、実際に小中学校での授業実践まで進めることは少なかった。

筆者は1988年に新潟大学教育学部に赴任した。それ以前から、社会科教育学研究室では、4年生数名のグループが卒業研究として数時間の実験授業に取り組む体制を構築して、その実績を着実に積み上げてきていた。そしてそれらの成果は、研究室紀要『社会科教育の理論と実践』にまとめられてきた¹⁾。

学生が共同して授業実践の研究に取り組むことは、4年次の課題として、主に卒業研究の一環として位置づけられていた。そのような研究室の学生指導方針を受け継ぎ、「社会科教材開発実習Ⅰ・Ⅱ」の重心を、フィールドワーク力の育成に置いてきた。

②【第二段階—2011年度からの「社会科教材開発実習Ⅱ」の改善・充実～3年生チームによる授業研究～】

3年前(2011年度)から、3年生が聴講する「社会科教材開発実習Ⅱ」のテーマ・内容の改善を図った。

「社会科教材開発実習Ⅰ」では、2. 3年生対象にフィールドワークの構想・実施・振り返りを内容として、フィールドワーク力育成を目指している。3年生が2年生をリードする形で本実習は組織される。2年生は、3年生のリードの下、フィールドワークの組織の仕方・方法等について基礎を学ぶことになる。

こうして、2年次と3年次に2回のフィールドワークを経験することになる。そのような経験を蓄積することを積み重ねて、「社会科教材開発実習Ⅱ」では授業構想まで取り組んできた。それを、3年前から授業実践・授業評価まで取り組むプログラ

ム等に充実発展させた。

「社会科教材開発実習Ⅰ・Ⅱ」の実習体験内容は、以下のように整理できる。

学 年	「実習Ⅰ・Ⅱ」で体験する内容
2年次	FW準備/FW実施/FW振り返り
3年次 後期中心	単元構想のためのテーマ・題材設定/ FW準備(対象選択・アポ取り・日程調整等)/FW実施/FW振り返り/単元構想/授業実践/授業振り返り・評価

※FW(フィールドワーク)

このように、3年次学生が学ぶ「社会科教材開発実習Ⅱ」を改善した背景・意図は、以下の通りである。

前述のように、学部4年一貫の実践的カリキュラム体制の中に「研究教育実習」が位置づけられている。しかし、学校現場での社会科授業実践力の育成として必ずしも充実していないと考えた。

3年次には春期及び秋期の主免実習に取り組むことで、授業実践への目的意識・課題意識が高まる。この3年次にこそ、フィールドワークを踏まえて授業構想・授業実践までを一つの学習課題として追究し、その中で直面する問題を共同して解決する実践経験を組織することが、学部学生の教職キャリア形成におけるタイムリーな発達課題であると受け止めた。

4年次の卒業研究で再度授業実践研究に取り組むことがあるとしても、3年次の時点でこそ、共同で授業実践研究にまで取り組ませることに価値があると判断した。

共同での授業実践研究への取り組みは、教員の同僚性を高める上で貴重な原体験的要素を持つと考えた。

(2) 先行実践研究の概要

秋田大学の社会科教育学研究室(井門・外池研究室)では、地域の諸事象についての調査を踏まえた授業実践に取り組み、学生の実践的授業力育成に取り組んでいる²⁾。

また、大学院レベルでみると、筑波大学大学院井田仁康研究室では、2000年度から毎年筑波大学大学院人間総合科学研究科授業「社会科教育学特講」として、地域の特性を踏まえた教育に関する調査・考察を組織し、報告書『地域と教育』を発行している³⁾。

井田の取り組みは、大学院生による地域の教育課

題の掘り起こしとそれを通じての地域調査能力の育成にあるようだ。授業実践がメインではない。

いずれも優れた取り組みであるが、それらの活動を通してどのような実践の社会科授業力が育つのか、分析的に捉えることは意図されていない。

そこに、「社会科教材開発実習Ⅱ」を通しての社会科授業力育成の可能性を探る本研究の価値があると考える。

(3) 「社会科教材開発実習Ⅱ」で育成する社会科授業力

1) 「社会科教材開発実習Ⅱ」の目標・内容—シラバスから—

「社会科教材開発実習Ⅱ」はどのような目標・内容で構成されているのか。以下に、2014年度のシラバスを掲載する。

項目	内 容
科目概要	「社会科教材開発実習Ⅰ」で取り組んだフィールドワークを基にした教材研究・教材開発研究を踏まえて、数時間の単元開発・授業開発に取り組み、2月から3月の期間に小学校若しくは中学校で授業実践に取り組む。そしてそれらの実践についての分析・評価を行い、授業開発の検証と授業づくりの課題を明確にする。
科目のねらい	○「社会科教材開発実習Ⅰ」で培った地域調査（フィールドワークの技法、教材発掘・教材研究の手法を踏まえて、次の観点から小学校若しくは中学校で社会科授業実践に取り組み、その分析・評価を行う。 1. 数時間の単元指導計画を受講者全員で作成する 2. 単元指導計画に基づいて全時間の学習指導案を作成する 3. 全時間の教材・教具・ワークシート等を作成する 4. 小学校若しくは中学校で社会科授業実践に取り組む 5. 授業分析・評価・検証活動に取り組む
学習の到達目標	1. グループで社会科授業研究の目的・研究仮説を設定することができる 2. 研究仮説に基づいて、社会科の単元指導計画・学習指導案を作成することができる 3. 各時間の教材・教具・ワークシート等を作成することができる 4. 小学校若しくは中学校で数時間の社会科単元についての授業実践を行い、授業記録を作成することができる

	5. 授業実践記録を基に、授業研究の目的・研究仮説の検証と授業実践上の課題・成果を明らかにすることができる
学習方法・学習上の注意	○受講者による共同研究を基本としている ○このために、共同で作品をつくるための協力関係やコミュニケーション関係を自分たちで構築することを期待する ○小学校若しくは中学校での授業実践までやり遂げる。そのために、真摯に授業実践研究に取り組むことが求められる
授業計画	1時. オリエンテーション —「Ⅰ」の成果の確認と「Ⅱ」の目標・ねらい・内容についての確認— 2～4時. グループでの単元構想（第一段階） 5時. 単元構想の検討・修正 6～8時. グループでの単元構想・指導案作成（第二段階） 9～10時. 単元構想・指導案の検討・修正 11～14時. 小学校若しくは中学校での社会科授業実践とその振り返り（4～5時間程度） 15～17時. 研究仮説を踏まえての授業実践の分析・検証と授業実践上の成果・課題のまとめ
評価の観点・方法	○以下の全ての活動に参加することが条件 1. 研究仮説設定・指導計画・学習指導案作成の作業に主体的に参加し、作品提出しているか 2. 小学校若しくは中学校での社会科授業実践に主体的に参加し、授業記録等に協力しているか 3. 授業実践後の検証・振り返りに主体的に参加し、報告書を作成しているか

上記シラバスに示してあるように、本授業はフィールドワークへの準備・フィールドワーク実施・授業構想から授業実践とその振り返りまで、実習・講義・演習などを織り交ぜて、半年以上の期間をかけて数名の3年生が共同で取り組むものである。授業実践は、毎年度末の2月から3月初めの時期になる。

授業実践の実施に当たっては、小中学校からの支援・協力体制が不可欠である。普段から、附属学校や近隣の小中学校からの支援・協力体制を築き上げることが、指導教員にとって大切な役割である。

2) 「社会科教材開発実習Ⅱ」を通して育む社会科授業力の基礎

「社会科紀要教材開発実習Ⅱ」でどのような社会科

授業力の基礎を育むことが可能なのだろうか。

目的に向かって、共同で取り組む。また、3年生は「社会科教材開発実習Ⅰ」を受講する2年生をリードして、フィールドワーク全般の企画・運営に取り組むことになる。授業構想や実践に臨むにあたっては、共同で単元計画や指導案を検討して、お互いに自己の考えを主張すること、その主張を通してより良い授業構想・実践に向けて協同し、合意形成を図っていくことが求められる。

筆者は、上記シラバスに示した内容・課題への取組・活動を通して、次のような4つの社会科授業力の基礎を実践的に育むことができると仮定している。

- ①フィールドワーク力
- ②教材研究・単元構想・指導案作成力
- ③授業実践・分析・評価力
- ④同僚性をベースとした共同研究力

これら4つの力は、それぞれ下位の要素で構成されると仮定している。

表2 社会科の基礎的授業力とその構成要素

①フィールドワーク力	
構成要素	○授業を前提とした調査のテーマ・課題設定力 ○テーマ・課題追究の為の企画力 ○フィールドワークの為の交渉力 ○現地調査・聞き取り調査の力 ○調査結果の集約・発信力 ○課題解決に向け2年生をリードする力
②単元構想・指導案作成力	
構成要素	○教材分析力 ○授業実践を前提とした単元構想力 ○単元全体を見通した展開構想力 ○子どもの実態を踏まえた授業構想力
③授業実践・分析・評価力	
構成要素	○実践校の子どもについての理解力 ○各時間のねらいに即した授業実践力 ○各時間の授業実践の分析・評価と修正力 ○より良い社会科授業を構想・評価する力
④チームワーク力	
構成要素	○同僚性を育む共同研究力 ○共同で共通の問題を解決する力 ○互いにコミュニケーションを深める力

3. 「社会科教材開発実習Ⅱ」の取り組み概要

(1) 2011年度～2013年度の取り組み概要

前記のように、「社会科教材開発実習Ⅱ」を現行体制に改善したのは、2011年度からである。ここで

は、2011年度から2013年度までの3年間の取り組みの概要を紹介する。その取り組み概要は、以下の表の通りである。

表3 2011年度～2013年度の取り組み概要

実施年度	単元開発・授業構想のテーマ・題材	準備・フィールドワーク・授業構想	授業実践校 授業時数
2011	新潟・古町掘り割り再生を考える	①7～9月準備 ②堀割り再生活動の聞き取り等 9月実施 ③10～1月 授業構想準備	新潟大学教育学部附属新潟小4年生 3月実施 時数4時間
2012	世界に誇る燕の洋食器製造	①7～9月準備 ②洋食器製造会社「アサヒ」見学・聞き取り等 9月実施 ③10～2月 授業構想準備	燕市立燕北小5年生 2月末実施 時数5時間
2013	新潟の誇る米菓産業の秘密を探る	①7～9月準備 ②米菓工場見学・協同組合聞き取り等 9月実施 ③10～2月 授業構想準備	新潟市立新潟小3年生 3月実施 時数5時間

1) 2011年度「実習」

2011年度には、嘗て新潟古町に張り巡らされていた堀割の再生への取り組みに至る歴史を学ぶ単元開発作りに取り組んだ。

「西堀通り」・「東堀通り」の地名に窺えるように、嘗て新潟町には堀が巡らされていた。しかし昭和39年の新潟国体前には、全ての堀が埋め立てられ、その姿を目にすることが出来なくなっていた。地名にその名残をとどめる状態であった。その堀割の再生に向けた地域の取り組みがなされていることに注目し、堀割再生の授業づくりに取り組んだ。このために、9月に3年生・2年生16名合同による古町の現地観察、再生活動に取り組む地域の人々への聞き取り調査活動を中心とするフィールドワークを組織した。現地観察、聞き取り調査活動等のフィールドワークの内容・日程については、基本的に3年生がプラン作りを担うように指導した。

2. 3年合同でのフィールドワークを踏まえて、秋期教育実習後に3年生8名が単元構想に取り組み始めた。指導案が完成するのは翌年の1月末であった。既に附属小学校に実験授業の依頼をしていたが、2月に附属新潟小学校4年生のクラスで5時間の授業実践に取り組んだ。5名の学生がそれぞれ1時間ずつを主担当授業者を務め、リレー方式で授業

に臨んだ。

2) 2012年度「実習」

2012年度は、新潟県の地場産業の代表的事例としての新潟県燕市の洋食器産業を取り上げることにした。5年生の日本の工業に位置づける内容である。

夏休みに入り、3年生が燕市の洋食器製造会社への見学・聞き取り調査を複数の会社に申し込んだが、会社の生産活動の関係で中々受入れOKをいただけなかった。そのため、筆者が燕市教育委員会に依頼して、受入会社を紹介していただいた。学生の目的に沿った調査活動を組織するためには、随時、指導教員がサポートすることも大切なポイントとなる。

幸い、洋食器製造会社「アサヒ」さんが受け入れて下さった。また燕市役所からも支援を頂き、9月の2、3年生合同のフィールドワークに際しては、吉田駅から「アサヒ」さんや資料館等のフィールドワーク訪問先まで、燕市のマイクロバスを手配していただいた。交通手段がなく移動に困っている中で、燕市教育委員会、燕市役所の支援を得て、フィールドワークを実現することができた。また、授業実践を燕市内の小学校で取り組みたいとの学生の強い希望があった。このため、筆者が燕市立燕北小学校校長先生に直接お願いし、また燕市教員委員会への申請を経て実現することが出来た。

3年生による単元開発への取り組みは、前年度と同様に秋期教育実習後になったが、3年生だけでの「アサヒ」さんの工場見学・聞き取り調査を1月になって行った。

2月末に燕市立燕北小学校5年生で5時間扱いの授業に取り組んだ。その授業に当たっては、「アサヒ」さんから洋食器作りの過程で用いる金属材料や製品（スプーン）の実物をお借りしたり、作業場面の録画の許可をいただき、動画等の教材作成に生かしたりすることができた。

又、授業実践までの間には担任の先生から数回にわたって指導計画へのアドバイスや指導をいただいた。授業実践の初日には、燕市教育長による授業参観と、授業後の授業担当学生へのご指導をいただいた。

燕市教育委員会・燕市役所・燕市の洋食器製造会社・燕市立公立小学校の全面的支援を得て実現できたフィールドワークから授業実践の取り組みであった。大学の教育研究活動にとって、地域の教育委員会・学校・市民・企業等との連携・協力体制作りが欠かせないことを実感した。

3) 2013年度「実習」

2013年度は新潟県が誇る地域産業の一つである、米菓産業を取り上げることにした。2、3年生16名合同のフィールドワークから授業実践までの期間は、過去2年間とほぼ同じである。3月初めに、新潟市立新潟小学校3年生のクラスを借りて、5時間扱い単元として授業実践に取り組んだ。その指導案や教材等については次節で述べる。

一点だけ本年度の取り組みの特徴を挙げると、新潟小学校での授業実践に2年生も可能な限り参加し、授業観察や授業記録等の補助活動に取り組んだことである。後述するように、昨年度の取り組みの振り返りの中で、2年次学生の参加と繋がり改善が課題であることが挙げられている。その改善の一つの方向性が示されているように見える。

(2) 2013年度の取り組み概要

2011年度・2012年度同様に、3年生を中心に1学期にテーマ・調査対象の選定に取りかかり、夏休みに入ってからフィールドワークの目的・内容・日程と調査訪問先への予約取りを分担して進めた。

「米菓産業」をテーマ・対象として取り上げることに決定し、学生が新潟市近辺の米菓会社への見学・聞き取り調査訪問の依頼を試みたが、難しかった。近年では、小学生の米菓会社の見学も難しいという。

最終的に、9月に実施した2、3年生16名合同のフィールドワークは、新潟市東区にある「せんべい王国」での見学・聞き取り調査活動となった。路線バスを利用しての活動である。後日、新潟県の米菓産業の全体を把握するために、3年生だけで長岡市にある新潟県米菓協同組合への聞き取り調査活動に取り組んだ。

秋期教育実習後、8名の3年生が共同で、数次の学習指導案作成・修正活動に取り組んだ。指導案の完成は2月末であった。この間、学生同士が夜を徹して議論をたたかわすこともあった。お互い授業に対する考え方や思いの違いから、時に相互の人間関係も微妙になる時もあったようである。厳しい現実であったが、その過程を経たことが、後述する評価に読み取れる。

指導案作成、また授業実践までの期間に、実践校の子ども達の学習の実態や子ども理解を図る機会を持てなかった。このために、子どもの実態を踏まえた学習指導計画・指導案作成が出来なかった。そのことも、後述の評価の中に反映している。

授業実践は、新潟市立新潟小学校3年生のクラスで3月3日から5時間扱いの単元として実施させていただいた。

学生作成の学習指導案については、資料が多くなる。本論では割愛する。

4. 「社会科教材開発実習Ⅱ」の検証 —2013年度聴講生の振り返りから—

(1) 調査方法

「教職実践演習」の活動の一環として、4年生に昨年度（2013年度）の「社会科教材開発実習Ⅱ」の取り組みを、「育てる社会科授業力」の4つの観点から振り返りのインタビューを組織・実施した。2014年10月30日が第1回目である。

昨年度の「社会科教材開発実習Ⅱ」では、「新潟の米菓産業」のフィールドワークと小学校3年生での授業実践に取り組んだ。第1回目のインタビュー当日は5名が出席し、教育実習等で参加出来なかった3名については後日個別にインタビューすることにした。（最終的に7名の調査結果となった。）

インタビューに当たっては、先ず後掲のチェックリスト（【資料1】）に各自記入してから、それを基にお互いに評価を陳述し、意見交流を図った（【資料2】にその意見集約）。

2011年度・2012年度に「社会科教材開発実習Ⅱ」に取り組んだ過年度卒業生（各8名・合計16名）についても追跡調査する必要がある。卒業した時点で、また教職に就いた若手・初任者教師としての立場から振り返ってもらうことで、本「実習」の社会科授業力育成の可能性・課題について実践者の立場・視点から検証する事が可能だからである。今回はそこまで検証することが出来なかった。ここでは2013年度に「社会科教材開発実習Ⅱ」に取り組んだ、現4年生のみの振り返りと評価に限定する。

(2) 「社会科教材開発実習Ⅱ」の意義・成果と課題

「社会科教材開発実習Ⅱ」で育成可能な実践的な社会科授業力として仮説的に設定した①～④の4つの「力」について、当事者としての学生はどのように評価し、どのような成果と課題を提起しているのだろうか。

- ①フィールドワーク力
- ②教材研究・単元構想・指導案作成力
- ③授業実践・分析・評価力
- ④チームワーク力

チェックリストの結果が後掲の【資料1】である。

各「力」についての評価には、個人差がみられる。ステロタイプな見方は避けるべきであるが、男性が比較的プラスの評価を、女性がマイナスの評価をしがちな傾向が読み取れる。項目によっては、「1」評価と「4」評価の差が、また「2」評価と「5」評価の差が認められる。

一方で、「力」の項目毎に評価の違いが認められる。各「力」について、学生の評価を概観してみる。

①フィールドワーク力

インタビューに答えた現4年生は、下表に示すように、2年生の時は3年生のフィールドワークの企画に参加して、燕市洋食器製造会社見学と聞き取り調査を経験している。

表4 現4年生が経験したフィールドワーク

2年次		3年次	
日時	2012年9月	日時	2012年9月～
場所	燕市	場所	新潟市東区
対象	洋食器製造会社「アサヒ」	対象	長岡市 せんべい王国 新潟県米菓工業協同組合

「フィールドワーク力」の項目については、2年次実習と3年次実習の両方について評価してもらった。

二つの実習に対する評価には、顕著な差が見られる。若干の個人差は認められるが、どの学生にも共通していることは、2年次での「フィールドワーク力」に対する評価が低いことである。これは男女の違いは反映していないようである。他方3年次については、評価する傾向が認められる。

2年次の低評価は、フィールドワークが3年生中心に企画・運営されている実態を反映したものと理解できる。フィールドワークのテーマ・対象・場所設定の段階、日程調整などの企画段階、当日の運営段階において2年生を巻き込んで共同して取り組むことを3年生に指導しているが、現実にはそれが機能していないことを示している。このために、フィールドワーク当日には、その目的・意義も十分に理解できないまま「お客さん」状態で付いて回るという姿がみられることになる。そのような現実がこの低評価に反映しているだろう。その点の改善を望む声が【資料2】にも見られる。

3年生の「実習」時には、自らが主体的に企画・運営に取り組んでいることから、評価が高くなって

いる。ただ、「2年生をリードする力」については、2年生の参加体制作りが不十分なために低評価となっていると理解できる。

②教材研究・単元構想・指導案作成力

個々の学生の評価が分かれている。1～4までの評価の差がでている。

「教材分析力」と「子どもの実態を踏まえた授業構想力」での学生間の評価の差が大きい傾向にある。

一方、「授業実践を前提とした単元構想力」にはどの学生もプラスの評価をしている。小学校の教育実習では、単元全体の流れを構想することは少なく、1時間の指導案作成に重点が置かれがちである。その点からみて、学生は共同して数ヶ月にわたって取り組む本「実習」を通して、単元構想力を身につけることが出来たと捉えている。正規の教育実習との違いがここにあるようだ。

③授業実践・分析・評価力

この項目も、個々の学生の評価が分かれて、1～5の幅で評価の差が認められる。

「実践校の子どもについての理解力」が全体的に低い評価で有り、また個々の学生間に評価の大きな差が生まれている。【資料2】にも「子どもの実態把握が不十分であった」との意見が出されている。「子ども理解力」が低いのは、前記のように事前に子ども達と交流し子ども達の実態を理解する時間を確保できなかったことが反映している。これは、学生の側の問題というよりも、指導教員としての私自身がその場や時間の設定をうまく出来なかったことに起因したものである。

m₂の学生は、「各時間のねらいに即した授業実践力」の要素項目だけが4評価と低い。他の項目は全て1か2でプラスの評価をしており、この項目だけが突出している。それには理由がある。当該学生は、5名の授業者に選ばれなかった。彼は極めて協力的に教材研究、単元構想、教材・教具作り、授業実践のサポートに取り組んでいた。だが、授業実践をできなかったため、その「力」を高めることは出来なかったと評価しているのである。共同研究体制の抱える課題の一面をよく照らし出している。

④チームワーク力

①「フィールドワーク力」同様に、2年次実習と3年次実習の両方について評価してもらった。結果は、①の結果を反映して2年次実習に対する評価が相対的に低く、3年次実習に対する評価が高くなっている。

2年次実習では、全て3～5の低い評価となっている。しかし3年次実習では、全て1～2のプラス評価となっている。チームワーク力・同僚性を高める上で重要な体験の場として捉えていることがわかる。

【資料2】にも、「仲間関係を築くことが出来た。あの取り組みがなければ、今の関係はないのではないか」との意見がお互いに出されている。「今・ここ」のゼミの人間関係、お互いの関わり方に強く影響している節目の体験・出来事と捉えていることが窺える。

3年次に一つのテーマを設定し、半年間以上にわたり共同して課題解決に向けて取り組むことの価値を認め、高く評価しているのである。

また、全体としてこの「実習」への取り組みが、

○教材開発・授業実践に取り組んでみて、自分自身の進路を考えるきっかけとなった（大学院進学）

○教員採用検査の集団討論に生かされた 自分の体験したことを踏まえて具体的に論じられた。経験を自信を持って表現できた（面接・小論）

○4年次の副免教育実習に生かされた。思考の流れを大切に授業

○子どもの思考の流れを大切にすることの大切さを小学校に学んだ →卒論で生かそう

○日頃のゼミの議論が活発になってきた

とあるように、その後の進路選択・教員採用試験・教育実習や卒業研究に有効に機能し、生かしているとプラスに評価している。

(3) 今後の改善のポイント・課題

今後の改善点として、学生から指摘されていることは、【資料2】にあるように、「2年生の参加体制を整えると良い。そうすると2年生もフィールドワークの準備や授業実践・観察と一緒に取り組むことで、3年次の主免実習への心構えや準備が出来る」というものである。

①④の項目で指摘された、3年生と2年生がお互いに連携・協力すること、2年生をお客さんにしないこと、に改善のポイントが絞られている。そのように改善することが、2年生にとっては3年次主免実習への体制作り・心構えの構築に繋がると捉えているのである。

2年生を「実習」の主体者として位置づける、そして3年生に倣いながら3年生をサポートしつつ、

学びを受け継いでいく縦の繋がりがうまく機能するように改善を図りたい。学年を超えた学びの繋がりが・共同性を構築取り組みには、今年度後半から直ぐに実施して取り組むことが可能である。

その上で、改めて4つの力の育成に「社会科教材開発実習Ⅰ・Ⅱ」が有効に機能しているかを評価したいと考える。

3年次の「社会科教材開発実習Ⅱ」が、4年次の学びや人間関係、進路選択等に有効に働いていること、この時期の共同研究経験が肯定的に評価されている点が見えてきた。3年次に取り組むことの意義がありそうである。

同時に、2年次の「社会科教材開発実習Ⅰ」との連携・共同体制を構築することで、2年生を「実習」の主体者として位置づけ、3年生と共に学びを深め成長する筋道を創り出すことが、次の（今年度後半からの「実習Ⅱ」）の改善事項として浮かび上

がってきた。直ぐに取り組むことで、学部生のじつ背的な社会科授業力をより高める道筋、カリキュラム作りに取り組みたい。

注)

- 1) 新潟大学教育学部社会科教育学研究室紀要『社会科教育の理論と実践』創刊号は1970年代である。
- 2) 秋田大学の井門・外池研究室の実践は、日本社会科教育学会全国大会で発表・紹介され、その内容を知る機会が数回あった。
- 3) 筑波大学大学院井田仁康研究室の取り組みは、報告書『地域と教育』にまとめられている。現在、『地域と教育』（13号、2014）まで発行している。※本論分は平成23-26年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）「出前授業方式による学生の環境教育実践力育成」の成果の一部である。

2013年度「社会科教材開発実習Ⅱ」受講学生による振り返り

【資料1】

【設問1】 以下に示す①～④の力を養うのに、どの程度有効であったと考えますか。

5段階で評価して下さい。

- 1 大変有効であった
- 2 有効であった
- 3 どちらとも言えない
- 4 あまり有効でなかった
- 5 有効でなかった

(mは男性、fは女性)

	2年次実習							3年次実習						
	m ₁	m ₂	f ₁	f ₂	f ₃	m ₃	m ₄	m ₁	m ₂	f ₁	f ₂	f ₃	m ₃	m ₄
①フィールドワーク力														
○授業を前提とした調査のテーマ・課題設定力	3	4	4	4	5	4	5	1	2	4	4	3	2	2
○テーマ・課題追究の為の企画力	4	5	4	4	5	5	4	1	2	4	2	4	2	2
○フィールドワークの為の交渉力	4	5	4	4	5	5	5	1	2	1	4	3	3	1
○現地調査・聞き取り調査の力	3	2	2	3	4	5	2	2	2	1	2	2	1	2
○調査結果の集約・発信力	3	4	4	2	5	5	4	1	1	2	2	4	1	1
○課題解決に向け2年生をリードする力								2	2	2	4	3	2	2
②教材研究・単元構想・指導案作成力														
○教材分析力								1	1	1	4	4	1	1
○授業実践を前提とした単元構想力								1	1	1	2	2	1	1
○単元全体を見通した展開構想力								1	2	1	2	3	1	1
○子どもの実態を踏まえた授業構想力								2	2	2	3	4	1	2
③授業実践・分析・評価力														
○実践校の子どもについての理解力								2	2	1	3	5	4	1
○各時間のねらいに即した授業実践力								1	4	1	2	4	4	1
○各時間の授業実践の分析・評価と修正力								2	1	2	2	3	1	2
○より良い社会科授業を構想・評価する力								1	1	2	4	4	1	1
④チームワーク力														
○同僚性を育む共同研究力	3	4	4	3	-	5	4	1	2	1	1	2	1	1
○共同で共通の問題を解決する力	3	4	4	3	-	5	4	1	1	1	2	2	1	1
○互いにコミュニケーションを深める力	3	2	3	3	-	5	2	1	1	1	1	1	1	1

【資料2】

【設問2】 今（4年生の後半を迎えた今）、3年次のフィールドワークから授業構想・授業実践・分析までの取り組みをどのように評価していますか。（意見の集約）

<p>1. 3年時にこの「実習」に取り組んで、意義があると思えたこと</p> <ul style="list-style-type: none"> ○仲間関係を築くことが出来た あの取り組みがなければ、今の関係はないのではないか ○主免教育実習で学んだことを本教材開発実習に生かした ○共同で指導案検討・評価に取り組めた
<p>2. 3年時にこの「実習」に取り組んで、大変だったこと</p> <ul style="list-style-type: none"> ●3月半ばまで授業に取り組んだため、教員採用試験の準備に取りかかるのが遅くなった ●子どもの実態把握が不十分であった
<p>3. 3年次にこの「実習」に取り組んでいたことによって、4年時になって意義があった・有益だったと思えること、自信になっていることがありますか？</p> <p style="text-align: center;">例えば、教員採用試験・副免実習に臨むにあたって・授業の見方・考え方 等</p> <ul style="list-style-type: none"> ○教材開発・授業実践に取り組んでみて、自分自身の進路を考えるきっかけとなった（大学院進学） ○教員採用検査の集団討論に生かした 自分の体験したことを踏まえて具体的に論じられた経験で自信を持って表現できた（面接・小論） ○4年次の副免教育実習に生かした 思考の流れを大切に授業 ○子どもの思考の流れを大切にすることの大切さを小学校に学んだ →卒論で生かそう ○日頃のゼミの議論が活発になってきた
<p>4. 改善した方が良い点がありますか？</p> <ul style="list-style-type: none"> ◎2年生の参加体制を整えると良い <ul style="list-style-type: none"> ・2年生もフィールドワークの準備や授業実践・観察と一緒に取り組むことで、3年次の主免実習への心構えや準備が出来る